



しまいました。

今まで、コップを洗ってくれたり、そばにいてくれるのがあたり前のように思っていたのがなくなってしまうたら、すごくさびしく思いました。

わたしが今までとしばあちゃんにしてもらってうれしかったことを、これからは、わたしがとしばあちゃんにやってあげようと思いました。学校から帰ったら、「ただいま、今帰ったよ。」と声をかけ、学校の出来事を話しました。

としばあちゃんに、ねながらお茶をあげるのは大変でした。わたしがお茶をあげるようになってから、としばあちゃんがお茶を楽しみにしてくれるようになって、はりきって飲ませてあげました。

わたしの学校の近くに老人ホームのあかいしがあります。時々ボランティアで行きます。おじいさんやおばあさんと一緒に手遊び歌をしたりします。そんな時、にっこり笑った顔を見ると、なぜかとしばあちゃんを思い出します。この本に出てくる智久君たちがホームに通って、おじいさんやおばあさんと一緒に過ごす時間が楽しいのがよくわかります。これからも、今のおじいちゃんとおばあちゃんに

優しくして、わたしがしてもらってうれしいことをやっていてあげたいです。おじいちゃん、おばあちゃんだけではなく、近所の人にも優しく接したいです。

自分のことだけを考えるのではなく、相手の立場に立った行動をしなくてはいけないこと。友達がいれば無理だと思ってもやることができるし、悲しいことは半分に、うれしいことは倍になる気がします。そして、夢を持つことによって成長していくことができるし、夢を達成するためには努力をすると思います。

わたしには、アナウンサーになりたいという夢があります。その夢に向かって自分を成長させていきたいです。

◆「止まったままの時計」

を読んで

中川根第一小6年 松本菜都子



昔、日本が戦争していたということは知っている。国と国が争い合い、人と人が殺し合う。そして、多くの人たちの命をうばってしまうのが戦争だ。戦争の時のことをテレビで見たり、

祖父母から話を聞いたりするけれど、そのひんさんは想像もつかない。ただ、わたしは今の平和な時代に生まれてよかったなと思う。戦争で亡くなったのは兵隊さんたちだけではない。赤ちゃんから老人まで、空しゅうでばくげきを受けてたくさんの人たちが亡くなっている。このお話の中のアサさんや翔のおばあちゃんのように、大切な自分の家族を亡くして心に傷を負った人たちもいるんだ。そして、戦争は60年以上も前のことだけど、この心の傷は治ることはないと思っただ。

戦争のせいで、生きたいのに生きられず夢や希望を心にしまったまま死んでいった人たちが、今の世の中を見たらどう思うだろう。親が子どもを殺す。子どもが自分の家族を殺す。このお話の中のタイムのように自殺してしまう子どもたち。毎日のように事故や事件が起きて人が亡くなっている。

「自分の命も人の命も、もっと大切にしてほしい。戦争のない

平和な時代に生きているのだから、夢や希望がかなう時代に生きていくのだから。」と、きつと言うだろう。

5年生の時、この世に命を授かり生まれてくることは奇せき的なことだから、奇せきの命を大切にしてほしいという話を聞いて感動した。わたしの父母は、わたしと姉によくこう言う。

「お母さんのおなかにいるころから今まで、まわりのいろんな人たちに見守られ助けられて大きくなってきた。そして、これからは一人きりで生きていくわけではない。生きていくわけではない。あなたたちがいいことをすれば、その人たちがもうれしくなるし、悪いことをすれば悲しい思いをさせて心を傷つけることになる。このことは、あなたたちの友達も同じことだよ。」と。

命は一つしかない。一度なくしたら二度ともどることはない。私は一人しかいない。だから命は大切にしなければいけない。外国では、今も戦争をしているところがある。生きられない人たちがいることを忘れないようにしたい。